

特集 伊万里津の水物語 (江戸時代から明治時代)

大正4年水道創設前の伊万里の水事情について、
郷土研究会 前田信義さんにお話をいただきました。

伊万里津の水とくらし

伊万里津は、伊万里川という清流によって、人々の暮らしを豊かにしてきた。

寛永6年(1629)伊万里湾内で初めての^{新田}新田堀が築かれ、中井樋から下土井まで堤防によって海流が仕切られた。天明5年(1785)最後の堀、八谷堀が完成、伊万里津への潮水は、伊万里川を遡上するのみとなった。

当時は、井戸を掘っても塩分が多く、生活用水としては使えないため、眼下に流れる伊万里川の水が唯一の生活用水だった。洗い物は伊万里川で、また米も伊万里川で洗い、仕上げ洗いと仕込みの水は、井戸水を使うか、買ってきた水が頼りだった。

水路が無かったので、顔を洗った水は捨てずに、拭き掃除に使い、その後、畑にまいていた。

伊万里川から離れた高台の船隠しの水、地藏さんの水、城の坂の水等の井戸が頼りだったが、誰でも使用できるものではなかった。金持ちさんは、岩栗橋を越え、水桶を担いであちこちに井戸水を買っていた。

生活用水は、伊万里川が主だったので洗い水や浴湯の排水で疫痢や腸チフス等が毎年のように流行し病人が広がり、亡くなる方も多かった。



当時の伊万里津積み出し場(現在の相生橋付近)

津の民の水不足を助ける法師の願い実る

江戸時代中期に院代として常入院日悟法師が、松浦町中野原より長谷山妙顯寺(江戸時代の山号)に住職代理としてみえた。

享保年間(1716~35)の初め、伊万里津の民の水不足の苦難を救わんと、毎朝法を唱えて津を巡り、その浄財を得て、伊万里川の潮止まりの上流に、自らノミを執り、岩を穿って取水堰を改良した。これを「常入井手」と称している。数年の歳月をかけ町の中にも溝を掘り、ふたつの水路を造り、民の命を護持した。町民は法師の徳行に万感の思いを込め「常入井戸」と呼んで敬意を表してきた。

以来、大正4年の伊万里水道通水まで200年近く生活用水を支えてきた。



旧常入井手跡(河川改修により今は存在しない)



市街地に残る水路の石垣

常入院日悟法師の思い

廣宣山妙顯寺の板碑には、「伊万里水道・水源地元祖 常入院日悟上人墓」遺言により、水源の見えるこの地に葬ると記されている。

遺言のとおり円造寺公園北部(旧伊万里水源地跡)の「常入井手」の見える方角に墓碑が向けられ、いついつまでも津の民の暮らしを見守り続けておられる。



常入院日悟法師の墓碑
明和五年(1768)戊子九月十五日没



板碑文



常入院日悟法師が、長谷山妙顯寺二十世瑞応院日頂代の折り掛け奉った「鰐口」

寛延四年未二月吉日 本願人 常入日悟